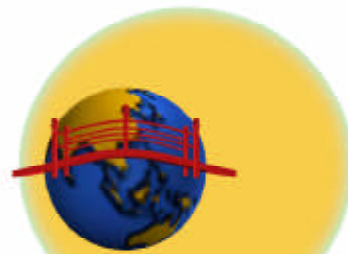


SGRA第5回研究会

# グローバル化と民族主義

～対話と共生をキーワードに～



*Sekiguchi Global  
Research Association*

**SGRA**

関口グローバル研究会

2001年10月1日(月)午後6時半～8時45分、東京国際フォーラムガラス棟402会議室にて、SGRA第5回研究会「グローバル化と民主主義 対話と共生をキーワードに」が開催されました。46名の参加者は、まず、9月11日にニューヨークとワシントンで起きたテロリストの攻撃の犠牲者とその家族に黙祷をして追悼の意を表しました。

その後、チベット文化研究所のペマ・ギャルポ所長が「民族アイデンティティと地球人意識」というタイトルで、「肌の色や宗教が違って、人間は同じなんだ。」という、ご自身の体験に基づいた信念を迫力ある語り口でお話くださいました。文革が終わり、一掃されてしまったチベット語の教師を外国から送り込むことになった時、その人たちを教育して、いつでも蜂起できるようにしよう、という提案に、ダライ・ラマ法皇はとても悲しい顔をされて、私達が暴力で訴えたら、どうして中国政府を批判することができるだろう」とおっしゃった、というエピソードなどは、仏教の教えに根ざした平和主義の力強さを伝え、聞く者の胸に迫りました。隣った人々が共存していくためには、普遍的な価値を確認しあうことが必要である。幸いにも、基本的人権など、それは国連憲章に定められている。しかしながら、そのような普遍的価値を押し付けるのではなく、相手に悟らせる。誰にも押し付けられなかったのに、文化や宗教が違って、徐々に、たくさんの人が洋服を着るようになったように、少しずつ説いていけば、チベットのことを海外の人々が応援してくれるようになり、そして今は情報が限られている一般の中国の人たちの中にも応援してくれる人がでてくるようになり、やがて民族同士が対立するのではなく、お互いの文化や宗教を尊敬しあいながら、共存していくことができるようになるだろうと信じている」というお話は、「地球市民の実現」をめざすSGRAにとっても、とても力強い応援歌でもありました。

次に、香港から参加した東京大学法学研究科在籍中でSGRA研究員の林泉忠さんが、「北京五輪と中国人『アイデンティティ：グローバル化と土着化の視点から』」と題してお話くださいました。林さんは、まず、北京五輪について、中国本土は「強い期待 大喜び」、香港では「まあいいんじゃない 商機への期待」、台湾では「どうでもいい 台湾への影響を心配」、海外華人はさまざまと分類した後、1980年代半ば以降の「中華世界」アイデンティティの多様化を分析しました。そして、中国本土のナショナリズムの増強と本土以外の土着意識の顕在化から、「大陸」と「非大陸」へ二分化されていることを指摘しました。オリンピックの北京開催によって、大陸では「求心力の強化に一定の効果があり 台湾・香港への姿勢も強まる可能性もあるが、今後の経済発展の持続と中央統制力の維持ができるかが鍵となるだろう。一方、非大陸では「五輪のみで中華世界の求心力が急速に強まることはなく 大陸の国力の増強は構造的に求心力を強める方向に導くが キーポイントは大陸への政治帰属意識が増強できるかどうか(つまり大陸の民主化が進むかどうか)」ということだという結論を導きました。

その後、SGRA地球市民研究チームの薬会チーフの司会で、フロアーとの質疑応答が為され、第5回研究会は盛会のうちに終わりました。

(文責 今西)

SGRA 第 5 回研究会

**グローバル化と民族主義 - 対話と共生をキーワードに**

2001 年 10 月 1 日 18:30 ~ 20:30

東京国際フォーラム G 棟 402 号室

プログラム

6 時 30 分 6 時 35 分	司会 : SGRA 運営委員 嶋津忠廣 挨拶 : SGRA 代表 今西淳子
6 時 40 分 7 時 20 分 ゲスト講演	<b>民族アイデンティティと地球人意識</b> ベマ・ギャルポ (チベット文化研究所所長、岐阜女子大学教授) 同じ両親から生まれた子供でも一人一人性格も体格も、多くの場合には好みも違う。つまり一人一人が「個」としての個性をもっているが、家族の一員として生活する上において、この個性は、お互いに認めあい尊重しあうため、不和の原因にはならない。同様に、各民族も歴史的背景、宗教的価値観、自然環境によって独自の文化民族性を持っている。この特性 (アイデンティティ) は元来、地球人としての人類普遍的幸福の追求の障害にはならないはずである。
7 時 20 分 7 時 40 分 研究報告	<b>北京五輪と「中国人」アイデンティティ</b> ~ グローバル化と土着化の視点から ~ 林 泉忠 (SGRA 研究員、東京大学法学研究科博士課程) 北京五輪で中華世界の求心力が強まるか----21世紀「中国人」アイデンティティの構造と行方を検討します。北京五輪を巡る中華世界のそれぞれの反応を切り口として、現在「中国人」アイデンティティの複雑な構造を分析した上で、グローバル化が進む21世紀の「中国人」アイデンティティの行方を探ってみます。
7 時 40 分 8 時 25 分	パネルディスカッション (フロアとの質疑応答) 進行 : 薬会 (SGRA 地球市民研究チームチーフ)
8 時 25 分 8 時 30 分	アンケートの回収

## ご挨拶

S G R A 代表 今西淳子

S G R A 代表の今西でございます。今日は雨の中をお集まり頂いて有難うございました。

### S G R A メッセージ

今日のゲスト講演をして頂きますギャルボ先生には3月にお会いしまして、是非S G R A 研究会でお話いただきたいとお願いしましたところ、快諾していただきました。その後、小泉総理大臣の靖国神社参拝問題があつて、それから教科書問題がありまして、これはタイムリーかなと思っていたら、9月11日にとんでもない大事件が起きてしまって、なにか、すべてが吹き飛んでしまったような気がします。

私たちは9月11日、ニューヨークやワシントンを襲った同時多発テロに強い衝撃と怒りを感じ、一般市民や救助に駆けつけた消防や警察の方々が大勢犠牲になったことに深い悲しみを覚えます。犠牲になった方々や家族の方に心から哀悼の意を表します。

#### 黙祷

このテロの攻撃も、それに対する報復攻撃も「多様性の中の調和」を基礎にグローバルなネットワークを構築する私達にとっての試練であると受け止めています。あらゆる武力攻撃を断固排斥し、国籍や文化や宗教や民族の違いを超えた人類の共生を目指して、新しい解決方法を求めなければいけないと考えています。私たちは、そのヒントが、国籍・文化・民族・宗教に関わらず、地球市民としての自覚を持つ人々のネットワークによる連帯に見出せるのではないかと期待しています。即ちそれが地球市民の実現を目指すS G R A の使命なのです。私たちは以上を確認し、S G R A の活動の生新一層の努力を重ねていきたいと思ひます。

以下の、地球市民としてテロリズム絶滅を目指すメッセージは、会員の李鋼哲さんが送ってくださったものをもとに作成しました。

1. わたしたちは地球市民の実現をめざす者として、国際的なテロ行為に断固として反対し、その要因である南北格差、民族差別、宗教差別、貧困などを、市民連帯によってなくすよう努めることにより、その防止に尽力します。

2. わたしたちは地球市民の実現をめざす者として、如何なる理由であろうと戦争による紛争解決に反対します。また戦争行為によって罪のない市民を犠牲にすることに対して断固として非難します。

3. わたしたちは地球市民の実現をめざす者として、平和を守る義務があり、そのために国籍、民族、宗教、文化を問わず市民連帯を強化しなければなりません。

4. わたしたちは地球市民の実現をめざす者として、平和を守るためには、各国政府、国際機関がテロ問題、及びその温床となっている貧困問題、民族問題、宗教問題などへ積極的に取り組むことを要望します。

# 民族アイデンティティと地球人意識

チベット文化研究所所長・岐阜女子大学教授

ペマ・ギャルポ

先ずこのような機会を頂いたことに対して心から感謝したいと思います。

結論から申し上げますと、結局、私たちは、厭でも、この地球上で限られた資源を使って、限られたスペースをみんなで共有するしかないわけです。人間一人一人がですね、白人・黒人・日本人・チベット人或いは中国人・インド人という、或いは宗教によって何々教ということを取ってしまえば、そこには「人」しかないと思うのです。そして、人類の歴史以来、その「人」として、皆一生懸命生きてきて、そして一日24時間しか与えられてないものですから、その24時間をどう使っていくかということ、そしてその生活技術と手段を工夫して、幸せになるように、今日よりも明日がよくなるように、そして少しでも長生きするよという事で一生懸命やってきたわけです。そういうお互いに共通の意識というものを持っている限りにおいては、私たちが地球市民として共存共栄することは十分に可能だと、私は思っております。

但し、そのためには共通の価値観というか、お互いに納得できる共通の価値観が必要だと思います。その共通の価値観というのは、特定の価値観を他に押し付けようとしたらうまく行かないと思います。そういう意味では、この研究会のように啓蒙活動が必要だと思います。私たちは他に対して特定の価値観を押し付けようとするのではなくて、徐々に相手に悟らせる行為が重要だと思います。

同様に、最近よく言われるグローバリゼーションにしても、地球上の私たちがみんな同じ色をして同じ背丈をして同じ宗教を信じるという意味ではなくて、むしろ地球的規模でものを見る癖をつけるということが大事なのだと思います。そういう意味で、私たちの日常生活のうえで、マハトマ・ガンジーが仰るように、自尊心が大切だと思います。自尊心は人間誰しも持つものだと思うし、自尊心があれば他者を尊重する気持ちは自然に湧いてくると思います。それがお互いに尊重しあうということであって、その中からお互いに理解しあうようになると思っています。そういう意味では、私たちが、例えば違う文化をもっていること、違う歴史をもっていること、違う皮膚の色をもっていること、これはむしろ私たちの1つのユニークネスとして、1つのアイデンティティとして、お互いにそれを人類共有の1つの特質として大切にしていけることが大事だと、私は思っているのです。

同じ親から生まれても、人間は一個一個の存在である以上、それぞれ能力も違いうだろうし、好みも違いうだろうし、場合によっては生活圈まで違ってくると思います。ですから、何か1つだけが絶対的だという物差しを作ったり、それを強制したりしても意味が無いことだと思います。そういう意味では、むしろ、国際化時代・地球化時代だからこそ、お互いにそれぞれの文化だとか宗教だとか、あるいはその他もろもろのそれぞれの民族ならではのものを、人類全体の財産として大切にすべきだろうと、私は思

っております。

それはどういうことかという、例えば私自身です。1959年、インドに難民として逃れ、生活しました。当時日本は、戦争直後で、自分の国のことで精一杯だったから、当然、難民救済には所謂白人しか来る人はいなかったのです。その白人というのは、東洋からすると、よく悪魔として現されるような人たちだったと思います。髪の毛が赤くて、目が奥に入っていて、鼻が長くて、まさに悪魔ですね。その悪魔が自分自身を助けに来ているということに対して、最初はある種の戸惑いというか、自分自身の意識の中で「エーっ」と思うようなことが当然あったわけです。

私は、幸いにも、難民の学校から、基督教のミッション系の学校に入れてもらいました。そこで初めて100点満点を取ったときに、私の先生は「そんなことはありえない。きっと貴方はカンニングをやったに違いない」ということを言うわけです。しかし、その先生自身は証拠を持っていない。私はやってないと言っても、先生は「やったに違いない」という。「やってない」と言うと、なぜ口答えをするかと言って、手を出しなさいと言って、右と左をこんなにあつい物差しで叩かれました。それで外へ行って立ってなさいと言ったので、私は廊下に立って、悔しくて泣いていました。たまたまそこに、ジュニアの主任が通りまして、どうしたと言うので、これこれこういうことで「僕はやってない。是非もう一回チャンスを下さい。試験を受けます。」と言った。たまたまスペリングの試験だったのです。そのスペリングのテストで、jelly という字の「lly」というのを一回確かに消しゴムで消して書き直したことを、今でも覚えています。再度担任の先生に試験問題をだしてもらって、主任の先生がもう一回試験をしてくださったんです。幸いにして運が良かったですね、書けるものしか出なかったのです。主任の先生は、その場で私を連れて行って、担任の先生に対して「どういう根拠があるか」と問いただしました。そこで担任の先生は、みんなの前で、主任の先生に、逆に、「それは貴方の先入観だと」言われました。後で聞

いたのですが、その先生は、チベット人は大体、猿が進化したぐらいの脳みそしか持っていないと思っていたのです。私は今でもその先生のことを恨んでいない。とてもいい先生でした。ただ、その先生が読んだ本、あるいは接した人間がそういう情報を提供したから、先生はそういうふうに関心していたのです。私はその後、何回も学級委員長に選ばれました。しかしながら、選ばれても、先生はいつも私を無視しました。



このように、私たちは、それぞれ、この地球上で起こっているいろいろな事によって、自分の文化とか自分の価値観とかが、逆に毒されていることが非常に多いと思います。自分が慣れていることが「常識」として当たり前で、これが一番正しいと思込んでいる面があります。で、そうではないもの、自分に慣れてないもの、自分に都合の悪いものは、それを否定する要素があると思います。そういう意味で私は Dr.マーチン・ルーサー・キングを非常に尊敬しています。なぜかという、黒人に対する言葉の中で「You are as good as whites.」「貴方は白人同様に素晴らしい」と言っている。白人よりも素晴らしいということは一言もいってない。これが大事なことだと思います。

いろいろな文化についても同様です。例えば、日本人は大体外国人に日本についての印象はと聞きます。特に俳優とか女優とか有名人が来ると空港でインタビューする。まだ日本に着たばかりで日本を見てないから印象があるかどうか分かりませんけれど、

私の日本人に対する第一印象は、日本人はなんてけちだろうということでした。それはなぜかという、お茶のせいです。私が日本についた夜、迎えに来てくださった先生は、チベット語が大変上手だった。それこそ第二次世界大戦のときに、特務機関としてチベットに入ってチベット語を特訓した人でした。その先生が「お茶を飲みなさい」と仰った。ちょっと見たら、小さい茶碗に半分ぐらいしか入ってない。中国の方もいらっしやいますけれども、大体、私たちは人に水一杯上げる時には、口のところまで注ぐじゃないですか。特にお客さんに対しては。インドでもそうですよ。普通いっぱい注ぐのが礼儀なのです。日本の場合には最初から茶碗が小さいのに、その半分しか入ってないから、私は日本人はなんてけちだろうと思いました。これが私の日本人に対する第一の印象です。

そして第二は、チベット人は縁起を担ぎます。半分しか入っていないのは非常に縁起が悪いのです。私は日本に来た時、ある特定の目的をもってきていたわけですから、これは私の目的は達成できないという先入観となって、困ったなあと思ったのです。縁起が悪い。それを消すために、般若心経という非常に短いお経を唱えました。仏教の教えをまとめたようなものですが、その中には「無い、無い、無い」というのが九つぐらいあります。それを九回唱えて、指を九回鳴らしたのです。それで自分自身に暗示をかけたわけですね。あると思えばあるし、無いと思えば無いし、だから縁起が悪いと思うことがいけないということを自分自身に言って、それで安心したわけです。

もう一つ私が申し上げたいことは、チベット人の頭の中に浮かんでくる「お茶」といったら、チベットでよく飲むバター・ティー。つまり紅茶の中にバターを足して、塩を足して、牛乳を入れてかき混ぜて飲みます。日本人の友だちにそれを飲ませると、「あ、このスープ、おいしいね」と言います。チベット人にとって、「お茶」といいたいのですけど、確かにスープみたいなものです。インドで生活していれば、「お茶」は、あの砂糖と牛乳がいっぱい入った、普通の人は飲めないような甘さのものですね。英国

時代以来、インドには紅茶の文化がありますから、お茶といったらそれが頭に浮かんでくるでしょう。そして中国の方だったら、恐らくジャスミンティーとか。普通はそういう形で、それぞれ自分が接しているお茶が頭の中に浮かんでくると思います。ところが、私が日本の夏、八月ころ、チベットのお茶をつくって飲もうとしたら、体が受け付けません。すっぱいものが上がってくる。チベット人として、飲んで欲しいと思ったり、懐かしいと思ったりはするけれども、やっぱり、日本ではチベットのお茶は飲めないのです。チベットという、海拔 4000 メートルぐらいのところだったら、絶えず水分を取らなくちゃいけない。乾燥しているからです。絶えず水分をとって飲むために、塩を入れるとまたたくさん飲む。そして、やはり油が必要です。今日いらしているモンゴルでも同じだと思いますが、私たちチベット人は、肉を食べたら手を洗うのは、普通はもったいない。人間の自然の行為として、油を顔につける。自分の皮膚を保護するための、人間の自然の行為なのです。

地球上の人たちがいろいろと違う文化をもっているのは、それぞれの歴史的背景、宗教的価値観、或いは自然環境の中で、精一杯、どうしたら自分は少しでも楽になれるかということ生きてきたからだだと思います。どうしたらいいかと、さまざまな工夫をしてきました。そして、その工夫がいつのまにか文化になりました。ですから、地球上のさまざまな文化に対して、良い文化・悪い文化はないと、私は思っています。或いは、最近よく言われている「洗練された」ということもない。それぞれの立場によって、価値基準によって違うことであって、実際、お釈迦様の時代から今日まで、ほとんど人間は根本的に変わっていません。何が変わってないかというと、それは人間の中にある、例えばさっき言った「無知」。先入観は無知と同じだと思います。お互いに知らなくて、自分の価値観しか持っていない。そして「欲」、それはいい欲も含めて。或いは「嫉妬心」。仏教でいう三毒。これは三千年経っても変わってないのです。

例えば9月11日のテロをご覧になって、誰も心が痛むと思います。誰もが心痛むし、テロというやり方は決して許されることじゃない。だからといって、アフガニスタンをアメリカのミサイルで攻撃して、敵を全滅することができたとしても、その爆弾が、何百個もの多くの爆弾を、多くの人々の心の中に作ると思います。それはなぜかというと、爆弾にしても核兵器にしても、自分でできたものでもなければ、自分で発射して自分で進んでいるわけじゃないからです。あれは根本的には、人間が持っている爆弾が発射しているのです。人間が、自分の中に持っている爆弾がそのままある限り、変わらないと思います。

何が私たち人類共通の、地球人として共通の1つの価値観としてあるかといえば、それはお互いに、まず人間であることを認め合うことだと思います。人間である以上、私たちはこの身体が5大要素、地球も人間の身体も全部、突き詰めていくと、土の要素だとか、水の要素だとか、空気だとか、あるいは熱だとか、その融合体として、バランスを保ち成り立っている。そして、さらに、人間とか生き物とかは、その上に意識というものがある。私たちは幸せに生きるためには、最低限度の条件として、食べなければならない。そして、安心して寝る場所を確保しなくてはならない。そして、場所によるでしょうけれども、ちゃんとした衣服もなければならない。ただ、衣服についてですが、私は初めてインドネシアのバリ島に行ったとき、これは地上の楽園だと思いました。それこそ私たちが小説なんかで読む、年中果物があって、鳥が鳴いていて、平和で、最近はかなり観光化されましたが、まさに1982年頃は、本当に楽園のようでした。しかし、2回、3回行って、或る日突然思ったのです。毎年同じサファリスーツを着ていて、これじゃお洒落ができない。やはり、夏もあって冬もあるのは素晴らしいなあと思うようになりました。

人間の最低限度の幸せの条件は何かと考えると、幸せの度合いというのが違うような気がします。世界で一番金持ちだからといって一番幸せだとは限ら

ない。残念ながら、日本のほうが、チベット人よりも自殺する人がはるかに多い。私たちの1年間の現金収入は200ドル、せいぜい300ドルぐらいでしょう。日本人は大体2万ドルから3万ドルぐらいでしょう。じゃあ、100倍の幸せがあるかということないんですよ。それなら、そういった物質的条件を否定するかというと、そうでもない。やはり、少しでも便利で、少しでも豊かになった方が当然良いと思います。良いとは思いますが、そういうのは絶対的な条件じゃないと私は思っているのです。

だとすると、例えば世界にはさまざまな宗教がある。そしてそれぞれの宗教に対して別の宗教から、こっちが正しくて向こうは邪道だとか言う。別の宗教が、ある特定の場所に、ある特定の時代にあったのは、それなりのニーズがあったからです。全部1つの宗教にしようという考えは間違いだと思います。なぜならば、頭が痛いときには、下痢の薬を飲んでも利きません。当然それと同じように、例えばイスラムという宗教はイスラムという宗教が生まれた背景というのがあります。そしてイスラムの背景というのは地理的条件もあるでしょうし、歴史的条件もあるでしょうし、さまざまなものが背景としてあるわけです。全部の病気を1つの薬で治せないように、世界中を1つの宗教で済ますわけにはいかない。但し私は、すべての宗教に共通するものがあると思います。それは、どの宗教も、人を憎しみ合うことを教えていないことです。どの宗教の経典でも、人を殺せとは教えていません。十戒にしても五戒にしても、それぞれの宗教の根本の教えは愛です。それは、私は、薬で言えばビタミン剤だと思うのです。誰が飲んでも大丈夫。そういう根本的なものを私たちがもっと大事にして、根本的な共通のものを私たちが探っていくと、それを理解し合うことができれば、私は地球人としてこれからも継続して発展することが可能だと思っています。

それはどういうことかということ、例えば、今の環境問題を見てください、食糧問題を見てください。食料は本当に足りないですか。足りないことは無い。あるデータによると1分間に28名の人々が餓死し

ている。それはどこかで何かが詰まっているのです。バランスが狂ってしまっている。マハトマ・ガンジーは、「神様は全ての必要を満たすためのものを与えている。しかし全ての欲を満たすためのものは与えてない。」と。ですから、この地球上のエネルギー問題にしても、食糧問題にしても、環境問題にしても、私たちは、自分を大切にすあまりに自分自身の首をしめている。地球全体のバランス、それこそ地球規模でものを見て、人類全体がどうやって生きていくかということを見れば、もう少しこの地球は住みよくなるし、自分達が地球人であることの意識が当然芽生えてくると思っています。

数年前に、私がテレビで一緒に仕事をしている中国人女性の結婚式の司会を頼まれました。その数日後に、日本人の方々、その女性のスポンサー（名前を言ったら皆さんご存知の立派な方です）とか、結婚式をする一流ホテルの副社長とか、出版社の社長とか、みんな心配し始めたんです。中国人の結婚式にペマさんが司会しても良いのか。中国大使館の人が来るよ。そしてその方々がさりげなく、貴方は降りた方がいいということなどをなんとなく匂わす。私が申し上げたのは、もし彼女が或いは彼が私にやめてくださいというのなら、私は勿論やめます。だけどそうでない限りは、私は一人の人間として常識を守りますよ。で、実際やりましたがなにもおこらなかつた。ちゃんと、中国大使館の大使婦人が、当時は文化担当の参事官でしたが、出席され、終わってからちょっと話しもしました。ですから、私たちは特定の人種とか宗教とか、直ぐそういうことでグループ分けする可能性がある。私たちは、「誰が」ということよりも「何が」ということを考えるようにするべきです。何が正しいか、何が間違っているか。イスラム教だって、昨日今日できたわけじゃないんですよ。もしイスラム教がそんなに破壊的であつたら、そんなに他を受け入れないものであつたら、昔からそういう要素があつたはずですよ。私はそう思いません。もしテロ活動をやる人があつても、イスラム原理主義の人たち、少数の人たち、それはごく一部の人たちの行いであつて、ごく一部の人たちの考えで

あると思います。

とはいっても、私自身も含めて、一人の人間は、成長過程で変わっていくんです。私が高校生の時に、ヒトラーの『我が闘争』を読みました。そして私の部屋にはチェ・ゲバラとかホーチミンの写真が飾ってありました。そのとき彼等は私の英雄でした。しかし、やがてキング牧師とかガンジーとか、或いはダライ・ラマ法王に変わりました。1980年に私はチベットに行きました。1979年に中国では鄧小平が再度復活して、チベットとの対話を始めました。私はその実態調査のために3ヶ月行ってきました。行ってみたらですね、一応学校ではチベット語を教えていることになっているけれども、教えている学校が無いんです。どうしてか聞いてみたら、カンボジアでもそうですけれども、インテリとかそういう人たちは当事は逆に懲罰の対象になったので、御坊さん達はみな刑務所に入っているか殺されているかということです。それで私たち外にいる人間からとりあえず50名、中に派遣しようということになりました。胡躍邦さんはそういうことについては非常に積極的だったのです。ところがですね、当時の私は一生懸命考えました。私なりに一生懸命考えて、チベットに行ったときに色々話を聞いてみると1967年から77年まで、国内ではある意味で何が起きてもおかしくない状況だったそうです。そのときなぜ、チベットで決起できなかったのだろうかとは考えました。それで、私はこの50名を、今日で言ったら特別訓練をして、高度の政治的意識をもたせて中に送り込んで組織させよう。今度中国で何かがあつたときは、点と点を線で結んで立ち上がれるようにしたいと計画を立てました。それで、大臣に話しました。「おう、それはいい考えだ。」他に、2~3人に話しました。みんなすばらしいと言いました。それで私は法王のところへ行きました。行くときは今日はどんなに褒められるかと思って…。で、行って話していると法王はだんだんと悲しそうな顔をなさるのです。そして私が話を終わると、「お前は本当にそう思うか？」と言う。その瞬間私は分かりました。これはもう受け入れられないということが。ただどうしようもないから「はい」と申し上げました

ら、「もし私たちが中国政府に対して、武力的なやり方とか、そういうことに対して批判しているのだったら、私たちが同じ事をやったら、それを批判する資格が何処にありますか？」と。

もう、その瞬間、目の前が真っ白になってしまって、速く逃げたいと思いました。そのほかちょっと報告して、帰りに階段を降りるときは、本当に足が重いんです。私は考えました。もし、ダライ・ラマ法王以外の普通の政治家だったら、多分、私の案に賛成しただろう。だけど、ダライ・ラマ法王だからこそ、そういう考え方を受け入れなかった。実は、前にもネパールで、チベットゲリラを中国軍とネパール軍が挟み撃ちしたときに、法王は、特にネパールに対して、中国は向こうから入ってきているんだからしょうがない、自分達の護衛だから。だけどネパールの土地にいてネパール人の血を流す権利は無いはずだ。私が幸せになりたいからといって他を犠牲にする権利は無いはずだということを仰ったんです。

つまり、私たちが地球市民としてやっていくためには、特定の人とか、特定の人種とかに犠牲を押し付けたら、それは多分成り立たないと思います。あくまでも「全ての人々」が、まさに人間として、人格を認められているということです。時代によって、「全ての人々」というとき、特定の色の人とか、ある一定の収入を持つ人々とか、そういう時代があった。あったけれども、今、私たちは、それこそ地球化時代ということになってくると、それこそ「全ての人々」です。それだけではなくて、最終的に私たちが本当に地球人としての意識を持つためには、他の動植物にまで思いやりの気持ちを持つことが必要だと思います。何故ならば、私たちの身体そのものに、動物的要素がある。そして私たちの中には、植物のもっている全てを、実の部分まで含めて、全部持っている。私たちの身体にも、絶えず消費していくものがあり、そして、生きているときはそれをある程度補給していく。例えば病気になると、何々が足りないからたくさん取りなさいと言われるますが、たくさん取るのはほとんど食料として他の動物であ

ったり植物であったりするわけです。そうすると、私たちは自分達の存在がどういうものかということをやそこらちゃんと理解する必要がある。

ある勉強会に行きまして、私の前の講師が、日本人は優秀であり、中国人・韓国人は馬鹿だと仰ったんです。で、会場からも誰も反対する様子が無かったから、私はあとで言いました。日本人は確かに優秀である。これは実証されている。例えばあの戦争の後の廃墟とされたものの中から、世界第二の経済大国にまでなった。それは何よりも日本人が優秀であることを証明している。それには異存は無い。だけど、中国人・韓国人が馬鹿だということはどうか。試練ということがある。チャンスがあれば、或いはそういう必要性があれば、人間は力を発揮する。だから、日本人が優秀だということを私は認めるけれど、中国人・韓国人は馬鹿だと決め付ける人がいたら、その人のほうが馬鹿じゃないかと。私は、自分自身が生きていくうえでひとつだけ決めていることがあります。それは、本人の目の前でいえない批判は、他の人にも言わないこと。本人の目の前で言うことは、もしかしたら、「ああ、そうだったか、私はそういう間違いをしていたか」と気づかせてくれることもあるかもしれない。

大体、今、学者によって分け方が違いますが、世界には3,000から5,000の民族と文化がある。そして、この3,000から5,000の民族と文化が、それぞれそこに生きている人たちにとっては、かけがえのないものなのです。例えば、ビルマ辺りに行くと、女性の首を長くしています。それが、ある人には美しく見えるのです。だから、美しく見える人がいるから、美しくしようと思って一生懸命伸ばす人がいる。誰かがそれを強制してやめさせようとしたら、それは違うよと言ったりしても、自分がそうでないということを悟るまでは、そう簡単にやめないと思います。私がインドにいた時は髪の毛が長かった。それで、学校で髪の毛を切れと言われた時には、もう学校をやめていいと思いました。髪の毛を切ってしまうと、自分が男じゃなくなるような気がしたのです。切れといわれると厭だという。しかし、自分

が病気になって出来物がいっぱいできてしまって、そしてだんだん抵抗力がなくなりますから、それで病院に入院してそこで切られたんです。切ってしまうとさっぱりするし、別に男でなくなるわけでもないし、それから二度と伸ばそうとは思わなくなりました。



私が申し上げたいことは、私たちがグローバリゼーションだとか、地球市民だとか言って、何か一方から押し付けることはあまりよくないと思います。例えば挨拶一つにしてもですね、ある人はお辞儀するでしょうし、ある人は握手するでしょうし、チベット人なんかは、昔はこんな風で、人から見れば、からかっている感じですね。しかも、舌を長く出せば出すほど、相手に対する敬意がある。でも、大事なことは、なぜチベット人はそういう文化をもったかということを知ることです。42代目の王様のときに王位争いがありました。そして、勝った方が負けたほうを徹底的に弾圧しました。弾圧すると、負けたほうもこれでは黙っていられないと暗殺団、つまり地下組織を作りました。地下組織の人たちは、舌の上に刺青をしました。そしてお互いに仲間であることを確認するために…。例えば役所に行く。今テロなんかがあるとみんな身分証明書を出してくださいといわれるでしょう。それと同じように、お前も一味じゃないだろうなあ。舌を見せなさい、となる。それで舌を見せたんです。そして、武器を隠してないだろうなあ。チベット人はお相撲さんみたいに髪の毛が長いんですね。そこへ武器を隠しました。それ

で髪を梳かしなさいという。そして着物というか、帯にも武器を隠しました。それで、帯を取ったんです。やがて自分の方から、私は潔白でございます、悪意はありませんということで、自分の方から舌を出して、髪の毛を梳かして何も無いということをするようになったのです。相手に対して自分は潔白です、と示しているわけです。それを繰り返し繰り返ししているうちに、やがて文化になって、しかもそのうち誰も何故そうするかわからなくなる。何故そうするかわからないけれども、それをし続ける。しなかったらあいつは態度が悪い。そうすると人間というのはまた、一生懸命相手にへつらったりする。なるべく長くする。それを別の人から見たら、なんか、からかわれている、あかんべーをやっているような感じです。

ニュージーランドのマオリ族の人たちに会ったことがあります。やっぱり彼等はおでこをこつんとぶつけたり、鼻をこすったりしますが、あれも立派な挨拶だと思います。どういう理由があるのか聞けなかったけど、きっと何かそれなりの説明がちゃんとあるはずだと思います。そして西洋の人たちの場合には、昔は白旗をもっていて、そしてお互いに抱き合っただけで、でも手は置かないでパンパンパンと…。おたがいに白旗を持って、そして武器を持っていないことを確認しあう。

大事なことは、挨拶は相手に対して「私は悪意を持ってないよ」ということを示すということです。勿論、挨拶もしたくないという人もいるだろうけど、通常、挨拶をするということは相手に対して少なくとも敵意をもっていないということです。日本は最近になって少し物騒になったけど、夜遅くどこかがあるいていて向こうから知らない人が来る。何も持っていなかったら、誰でもこぶしを握るんですよ。「もし」と思って。そして、相手が「こんばんは」と言ったら、その瞬間気持ちが緩むでしょう。相手に気を許す。だから、私は別に握手することだけが地球人の挨拶だと思わないし、合掌だけが地球人の挨拶だと思わない。大事なことは挨拶をするというその行為です。そして、お互いにそれを理解しあうことです。

地球人として私たちがこれからやっていく上で大事なのは、1 つはインテグリティ。それから、セルフリスペクト。やはり「自尊心」ということがキーワードだと思います。自分自身の言動に対して、それこそ自分自身の服装に対して、自分自身の歩き方に対して、全て自分自身のちゃんとしたセルフリスペクトを持つこと。セルフリスペクトを持てればミューチャル・リスペクト、お互いに尊重し合う、ということは当然生まれてくると、私は思っています。

冒頭に申し上げましたように、私の話には、これだという結論はありません。ただ、私自身が 40 数年間生きてきて、私はこう思っています。人間は黒かったり、赤っぽかったり、白かったりする。だけ

ど、中身はみんな同じだと。みんな少しでも幸せになりたい、みんな今日よりも明日のいい生活を望んでいると。そして、実際、お葬式に行った人たちも、自分はずっと生きるんだと思っている。本当は死ぬんですよ、死なない人は誰もいない。真実として、私たちはみんな死ななければならない。それと同じように、私たちみんな生きるために精一杯頑張っていて、そして精一杯生きるための工夫をしている。そういうお互いの存在を認め合うということが大事だと、私は思っています。

時間になりましたので、また後で質疑応答のときに色々言っただけのことと思います。どうも有り難うございました。

# 北京五輪と「中国人」アイデンティティ

～グローバル化と土着化の視点から～

林 泉忠

SGRA 研究員、東京大学法学政治学研究科博士課程

## ・問題提起

皆さんこんばんは。もともとあがり性のうえ、ギャルが先生の素晴らしい講演の後で報告を行うので一層緊張しております。先生のいくつかのポイントにまったく賛同でございます。民族でモノを正しいか正しくないか判断するのではなく、正義で判断すべきではないかと私は思います。

今日、私は、別な角度から、より具体的な問題を取り上げたいと思います。テーマは、「北京五輪と『中国人』アイデンティティ」ということで、「中華世界」の人々のアイデンティティ構造について簡潔にご説明します。用意している内容は結構多いですが、限られた時間でなんとか簡単に分かりやすくお伝えできたらと思います。

まず、今回のテーマを選んだ動機ですが、ご存知のように2008年のオリンピックを北京で開催することが決定され大騒ぎでした。「北京五輪」が、現在の中華世界のアイデンティティについて、その求心力を強めることができるかどうかを考えてみたいのです。結論は後で申し上げますけれども、まず、「北京五輪」をめぐる「中華世界」のそれぞれ異なった反応を紹介し、それから現在の所謂「中国人」のアイデンティティの実情を説明した上で、グローバル化が進む21世紀の「中国人」の行方について、探ってみたいと思います。

何故「北京五輪」ということをいえば、所謂アイデンティティの表出について、いろんな要因とかきっかけがありますが、その一つは所謂国家レベル

の、あるいは民族レベルの大イベント、大事件が発生すると、一人一人のその国や民族に対するアイデンティティが一層意識されて、そのアイデンティティを反映する集団的行動も現われやすいからです。

今回のアメリカで発生したテロ事件もそうですね。アメリカの国民は、今回のショックで、短期間とはいえ結束力が著しく高まっています。また、それだけではないですね。アイデンティティの表出は、自分の国・民族に関わる大事件というだけでなく、場合によっては、「敵」または「仮想敵」の国で起きた大事件にも刺激されます。このテロ事件で一番喜んでるのは中国人とも聞いています。みんなが喜んでるわけではないと思いますけれども、確かにニュースを聞いて拍手した人も結構いたようです。もちろん、中国政府は対テロの姿勢を打出して、また60数名の中国人も被害者に入っているということを知った後、喝采する人も大分減ったと思いますが、その「中国人」が、今日のテーマですが、どちらかという大陸の方です。いずれにせよ、国の大イベントや大事件は、人々のアイデンティティに刺激を与えやすいのです。

## ・「北京五輪」を巡る「中華世界」の反応

さて、今回の「北京五輪」の決定について、一体、「中華世界」の反応はどのように話されているか簡単に説明します。まず中国本土から見ましょう。一言でいいますと、「強い期待」です。勿論、前回失敗しましたので、今回は結構慎重になりました。しか

し他の地域に比べると圧倒的に強い関心、強い期待がありました。それは発表までのことですが、結果が発表されると、皆喜びといいますか熱狂といいますか、若い人もこういう風に（歓喜の写真をパワーポイントで見せながら）民族意識が高まっているわけです。



<http://www.beijing-2008.org/xwzx/tpwx/5778.shtml>



<http://www.beijing-2008.org/xwzx/sbyw/5780.shtml>

では、香港はどうでしょうか。勿論いろんな考えがありますが、一番多いのは、恐らく、「まあ良いことじゃないんですか」というようなことです。否定ではないですが、本土ほど喜ぶということでもありません。むしろごく現実的に、「景気回復になればいいナ」と考える人が多いようです。今は本当に景気が悪いですからね。

さて、台湾はどうでしょうか。一番多いのはおそらく、「どうでもいい」でしょう。無関心のような考

えですが、それはどちらかということ、発表までの話です。成功したニュースに接したら、皆さん考え始めました。一体台湾にとっては良いことか悪いことか。いくつかのことを考えているようですが、たとえば、中国本土がますます強くなって、逆に台湾の方がますます停滞していくのではないかという不安感もあれば、安全保障の面では「いいことだ」要するに2008年までは中国からの攻撃は無いという安心感もあります。それは、国際社会の目があるからです。

さて、「中華世界」というと、本土・香港・台湾だけではなくありません。シンガポールのように四分の三以上の人口を占めているような国もありますし、中国人あるいは中国系社会は実にあちこちにあり、とても複雑です。戦前ないし19世紀に移民した人もいれば、戦後、とりわけ80年代以降移住した人もいます。それは、80年代から留学生として出国し卒業後現地で就職して居住している人たちを含めません。また1997年の中国への返還を控えて香港からの移民もいます。もちろん、戦後になって台湾から移住したものもいます。要するに、時代時代でさまざまな移民がいるわけです。従って、「北京五輪」の決定に対する華僑・華人の反応もばらばらであって、簡単に纏められません。喜んでいる人もいれば、無関心の人も少なくないでしょう。

### ・1980年代以降「中華世界」 アイデンティティの多様化

時間の関係であまりゆっくり話せないですけども、「中国人」といいますか、「中華世界」のアイデンティティはどういう構造になっているかということに、皆さんが関心を持っているでしょう。一言でいいますと「中華世界」の人々のアイデンティティは非常に多様的です。文化的には中国文化を受けていても、それぞれが持っているそれぞれのアイデンティティは一様ではありません。

## 中国ナショナリズムの高揚

先ず大陸から見てみましょう。80年代から、中国本土では所謂ナショナリズムがとても高まっています。先ほどの「北京五輪」の決定を受けての熱狂からも分かるでしょう。さて、このような中国ナショナリズムの高揚は、どのような背景を持っているかといいますと、特に三つの要素が重要だと思います。

まずは、屈辱の中国近現代史から脱却の強い意志です。ご存知のように、中国は19世紀の半ばのアヘン戦争以降、列強の圧迫で所謂不平等条約を相次いで締結させられて、また30年代から40年代半ばまで日本の侵略も受けて、それから1949年以降30年間の鎖国体制で外と接触できなかった時代に置かれていました。今の中国政府と多くの国民は、屈辱の歴史と決別しようとするにとどまらず、さらに一歩進んで強国を目指して国際社会でリーダーシップを発揮したいという強い意志をもっています。

それからもう一つは、「改革・開放」政策の成果です。ご存知のように、中国の1980年代以来の著しい経済発展は、世界的に認められています。それを背景に、本土の人々は自信をもつようになったのも当然でしょう。この自信はある意味では自負でもあります。

それから三番目に重要なポイントは、「愛国主義」教育の効果です。1970年代の末までは、「社会主義」というイデオロギーが国民の行動を左右するキーワードになっていましたが、80年代以降、「社会主義」に代わって「愛国主義」が前面に打出されるようになりました。とりわけ1989年の「天安門事件」以降、中国政府は子供や国民に「愛国主義」の教育を重視しています。これは非常に効果があると思います。以上の三つの要素で、本土の中国人のナショナリズムが高まっているわけです。それが本土の状況です。

### 「香港人」アイデンティティの顕在化

香港の方はどうでしょうか。確かに、現在の香港

の原点を求めるならば、19世紀の半ばに起きたアヘン戦争における中国の敗北でイギリスに割譲された事件まで遡ることができます。しかし、私は、現在の「香港人」アイデンティティの原点は、私の造語ではありますが、「香港人共同体」の確立に求めるべきだと思います。

そのようなものがきちっとできたのは、戦後です。1949年まで、中国と香港の国境は開放されていて、誰でも簡単に出たり入ったりできました。パスポートなどは特に要りません。そういう環境に置かれていたため、香港に住んでいた人々は自分なりの1つの共同体意識をなかなか育てられなかったのです。しかし、49年に中華人民共和国の成立をきっかけに中国と香港の国境が閉鎖されるようになりました。それから香港の人々は、50年代の工業化、60年代の経済発展を経て自分のコミュニティーを出現させました。

それと同時に、所謂「香港文化」が作られました。ブルース・リーのカンフー映画や、広東語ポップスなどです。これらは、決して大昔からあったわけはありません。60年代から特に70年代にできたのです。それらを作りだした人々の多くはいまだ40歳代か50歳代です。

周知のように、中国は30年間の鎖国体制に置かれて経済システムも基本的に計画経済でした。逆にこの時期の香港は自由経済システムで高度成長を遂げました。経済的格差は80年代・90年代には非常に大きかったです。一人当たりのGNPの差は30倍前後である時期は長く維持されていました。また、政治・社会面の相異も大きかったです。香港では、中国で実施されている社会主義を採っていないばかりか、イギリスの植民地でありながら、長い間高度な自由が守られてきました。先ほども言いましたように、大きな意味で中国の伝統文化としては共通しているけれども、香港は戦後、「香港共同体」が出現して「香港文化」も創られました。それで香港自らのアイデンティティが生まれたわけです。

もちろん、「香港人」アイデンティティの生成過程においては、外的刺激がありました。何故いきなり自分が「香港人」と思うようになったのでしょうか。

表1 返還後香港住民の「中国国民」としてのプライドの程度

	1998年6月3日 - 4日	1999年6月21日
もっている	31.6%	37.1%
もっていない	65.7%	60.8%
分からない/言い難い	2.8%	2.1%

出所：香港大学社会科学研究中心『民意快訊』1999年6月30日特別号のデータに基づいている。

それは返還の問題に関連しています。返還問題が浮上し始めたのは80年代の初期ですが、ちょうどその時期、中国本土は「改革・開放」政策が打出されて、30年間中断した香港と中国の交流が再開されました。香港の人々が大陸の人々と接触した時、長期的な隔離のため、相手のことと自分とは「違うなあ」と思ってしまう人が多かったです。アイデンティティの成立は外との区別によるものということですね。

### 「台湾ナショナリズム」の出現

さて、台湾のアイデンティティ問題はより複雑だと思います。いわゆる「台湾ナショナリズム」の一つの特徴は、「香港人」アイデンティティよりも政治化しているということです。大陸と距離を置きたいにとどまらず、政治的独立までしたいという意識が入っているわけです。この点は香港と大いに異なっています。さて、それはなぜでしょうか。3つの要因があると思います。

まず第一に、歴史的要因で、すなわち本土との長期的隔絶ということです。明の時代、清の時代においても、所謂「海禁政策」があって、本土と台湾とは簡単に往来できませんでした。そういいながらも、大陸から台湾への移住者は続出していました。一方、皆さんご存知のように、日本の台湾支配は100年ちょっと前から始まりました。それ以降、台湾と中国本土との交流は一層減少されるようになりました。

第二の要因として挙げられるのは、いわゆる被支配歴史の繰り返しということです。台湾は、過去400年余りの間、オランダ・スペイン・鄭氏・清朝それから日本に支配されてきました。日本から今度は中華民国の国民政府になりました。所謂被支配の歴史の繰り返しという思いが、多くの台湾の人々、特に年配の方々の頭の中にかかり入っています。

一方、人々のアイデンティティへの影響について、遠い歴史的要因よりも、現在の人々の経験はやはり重要なのではないかと思います。まだ生きていらっしゃる年配の方々の日本経験は、同時代の中国本土の人々の日本経験と全く異なっています。現在、年配の70代、80代、つまり李登輝さんの年代の人々は若い時に日本経験を受けていました。彼達の多くは「親日的」だと形容されています。しかし、年配の方々の日本への思いについて、日本の台湾支配はよかったというよりも、1945年に日本が敗戦して、台湾が中国に返還された後に、国民政府初期の統治が悪かったということが大きいと言えます。というのは45年、国民政府の接收部隊が台湾に来た時、歓迎のムードが確かに存在していました。しかしその後、いろんな腐敗や、台湾人排斥の現象が現われました。例えば、中高級公務員に台湾人をほとんど採用しないということがありました。「こういう祖国か」というような感想は、当時多くの台湾住民特にエリートたちの間に現われました。それがいわゆる「2・28事件」発生の一つ大きな要因となりました。

但し、戦後初期の国民政府のやり方に比べて、戦前日本の統治の方が良かったという考えには、一つの事情があります。いわゆる「親日派」の70代・80代の方々が受けた「日本経験」はどちらかというと、日本統治の後期です。前期にはかなり抗日運動がありました。20年間続いていた武力による抗日運動があったのです。しかし、後期は、若干でありながら、日本の法体制もできて統治も安定化したということです。

要するに、比較的的社会秩序があって生活も安定していた日本統治末期に比べて、戦後初期の国民政府の施政は多くの混乱をもたらしたため、年配の台湾住民は「親日感情」が存在しているわけです。一方、戦前中国本土の住民の「日本経験」は台湾のそれとは対照的です。30年代から40年代半ばにかけて、日本の侵略およびそれに伴う戦争犯罪を受けた中国本土の同時代の住民およびその子孫は、今日になっても依然として反日感情が非常に強いです。そしてこの反日感情は近年中国大陸のナショナリズムを支える基盤の一部にもなっています。いずれにせよ、台湾住民の戦前の「日本経験」と戦後の「祖国経験」は、大陸のそれとは大いに異なっています。この点は台湾住民のアイデンティティに大きな影響を与えています。もちろん、戦後台湾と大陸の歩みの相異も重要であります。

大陸の「中国ナショナリズム」に対抗する「台湾ナショナリズム」高揚の3番目の要因に、どっちかという新しい方ですが、とりわけ80年代以降、台湾の人々は中国の対台湾政策をテレビやニュースなどを通してそのまま知って、かなり反感を買っていることが挙げられます。武力攻撃を放棄しないことや「一国二制度」という政策の固持、96年総統選挙期間に行われたミサイル演習、台湾の国際地位上昇への長期的阻止なども、台湾住民の「中国離れ」を加速した大きな要因なのではないかと私は思います。

しかし一方、中国の方がこれからますます強くなると、中国に対する見方は修正されていくと同時に、自分のアイデンティティの維持も影響され、それを調整する必要があるかどうかと考える人が増えているようです。

表2 台湾・香港住民アイデンティティの変遷（略図）

		「台湾人」/「香港人」	「中国人」	「台湾人」/「香港人」であり「中国人」である
1985年	香港	59.5%	36.2%	-----
1991年	香港	56.6%	25.4%	14.2%
1991年	台湾	13.6%	13.0%	24.0%#
1992年	香港	49.3%	27.0%	21.1%
1992年	台湾	23.7%	23.4%	49.7%
1994年	香港	56.5%	24.2%	16.0%
1994年	台湾	33.8%	27.3%	35.8%
1997年	香港	55.8%	32.5%	.9.4%
1997年	台湾	36.9%	23.1%	34.8%
1998年	香港	57.3%	30.0%	10.1%
1999年	香港	63.4%	30.7%	-----
2000年	台湾	45.0%	13.9%	39.4%

注：#残りの49.4%の内、「中国人と台湾人とは同じ」と回答する人は48.7%。

出所：香港大学社会科学研究中心『民意快訊』、台湾行政院大陸委員会 (<http://www.mac.gov.tw>) 定期委託調査資料に基づき、筆者作成。

## 華僑・華人のアイデンティティ問題

さて、世界各地の華僑・華人社会のアイデンティティはどうかといいますと、非常に複雑です。ここではとりあえず1950年代以前に海外に移住した人々のことを中心に話します。戦後の華僑・華人のアイデンティティに最も影響を与えた要因は三つ挙げられます。

まずその一つは、中国の分裂による「本物中国」の争いです。1949年の内戦終結に伴って、中国は大陸と台湾に分裂して、家族も含めて一部は親国民党政府（台湾）、一部は親共産党政府（大陸）に分けられました。戦後とりわけ50年代から80年代にかけて、どちらかということ、海外の華僑は親国民党の方が多かったです。多くの華僑は蒋介石・蔣経國が作った戦後の台湾を本物の中国とっていました。それは、大陸では1949年以降、特に60年代後半から10年間にわたって文化大革命によって、多くの伝統文化は破壊された事情もあったわけです。しかし、90年代からの台湾では「台湾化」という李登輝の政策が進んでおり、台湾はむしろ華僑のイメージしている中国ではなくなりました。私が1997年からの二年間にわたってアメリカに滞在していた時、いろんな華僑・華人と話しましたが、特に中華民国を支持してきた年配の華僑の間に、そういう意識が非常に強かったです。

もう一つの要因は、1980年代以降、中国の国力が非常に強くなってきていることです。経済力だけではなく、軍事力も、国際的な地位も、高まっている中で、海外の華僑・華人もアイデンティティをめぐって迷い始めています。特に「李登輝バッシング」の中で、一部の華人はそのアイデンティティを大陸の方に向け始めました。しかし、それはどちらかということ、50年代以前に移民した「老華僑」の方が多いです。その2世・3世になると、状況は大きく異なってきます。

すでに多くの研究から2世・3世の方は中国人意識が弱いと指摘されています。中国語はあまり話せないばかりか、居住国への帰属意識も多かれ少なか

れ生まれてしまいます。例えば、アメリカに生まれた中国系のアメリカ人の間に、自分は本物のアメリカ人かどうかという悩みも時々起こっています。居住国にいて、そして居住国との関係は、華僑・華人のアイデンティティに影響を与える第三の要因になるのです。

## 「中華世界」アイデンティティの趨勢

80年代以降「中華世界」のアイデンティティはどのような傾向になっているかということをもとめてみましょう。

まず一つは、中国本土の「中国」ナショナリズムの増強です。このナショナリズム高揚の背景について、先ほどご説明しました。注目して頂きたいことは、何故私は中国に括弧をしているかということです。それは、「中国」という言葉は、中華民族の意味で考えているか、今の中華人民共和国の国民にするか、実にいろいろ解釈があるわけです。「中華世界」においては、「中国」の定義をめぐる論争が、実際、起きています。いずれにせよ、私は、現在高まっている中国本土のナショナリズムは、文化や民族の意味としての「中華ナショナリズム」と、中華人民共和国の国益を優先する「中国（大陸）ナショナリズム」の両方を含んでいると考えています。但し、中国本土の若者のナショナリズムは、どちらかというと後者になる傾向が見られます。

今一つは、中国大陸以外の「中華世界」に属する人々の土着意識が相当に顕在化していることです。先ほど申し上げましたように、華人・華僑の中国への遠心力が進んでいると同時に、とくに台湾・香港の土着意識は強くなっています。

「中華世界」のアイデンティティは、非常に多様化で複雑ではありますが、1980年代以降顕在化してきたこの二つの動きは、段々「大陸」と「非大陸」へと二分する方向に集約していくと私は見えています。つまり、中華人民共和国の国益を優先する「大陸中心」の「中国（大陸）ナショナリズム」の高揚と、それを牽制する「非大陸」のそれぞれの土着ア

アイデンティティの顕在化という二分法的趨勢になっているのです。

## ・グローバル化と「中華世界」の アイデンティティ問題

さて、最後に、今日のテーマに関連しますが、グローバル化の時代に、この「中華世界」のアイデンティティはどうなっていくかということについて、私の考えていることを申し上げます。

そもそも「グローバル化」という意味をもう一度考え直す必要があるのではないかと思います。東大の図書館を調べますと、「グローバル」という言葉がタイトルに入っている本は、なんとその90%以上が経済関係の本です。しかも、多国籍企業関連の本は圧倒的に多いです。結局、「グローバル化」というのは、経済の意味でしかないのでしょうか。文化の「グローバル化」はどうでしょうか。そして、アイデンティティと「グローバル化」とはどのような関係にあるのでしょうか。つまり、地球レベルの「グローバル化」が進むと、人間一人一人のアイデンティティはそれによって変わるのか、どういう方向に変わるのか、といった「グローバル化」に関わる問題や「グローバル化」の進展によって持たされる影響と課題は、実に色々なところに起き得るし、また個人一人一人にも関係しているのではないかと思います。従って、現在の社会に生きている我々は、「グローバル化」の意味を経済の視点からだけではなく多角的に捉えて、そして「グローバル化」が派生してくる環境や文化やアイデンティティなどの諸問題を真剣に意識する必要があるのではないかという気がします。

さて、地球の「グローバル化」現象と「中華世界」のアイデンティティとの関係をどう考えればよいでしょうか。二つのポイントを述べさせていただきます。

まず第一に、「グローバル化」の時代になりますと、「中華世界」のそれぞれの帰属意識すなわち「大陸」の「中国（大陸）ナショナリズム」も「非大陸」の各土着アイデンティティもその増強は抑制される可能性が十分あると思います。ただし、それは「グローバル化」の時代にちゃんと入っているというのが

前提です。今はすでに入っているのかもしれませんが、私は疑問をもっています。確かに、経済面では、中国、香港、台湾といういわゆる「兩岸三地」は、越境する資本の増大による相互依存が進んでいますし、文化面では、ポップスや映画の統一した市場の形成の進展が見られて、他の文化分野の交流も相当盛んになっています。しかし、政治面では、統合の方向は見えません。確かに、香港とマカオの中国への返還は一応無難に成功しました。しかし、この両地域で実施している「一国二制度」は、ある意味では中国の国民分化を制度化させていると言えます。また、一方、台湾の方は、むしろ「中国離れ」の政治的自立への動きがますます活発化しているのではないのでしょうか。要するに地球の「グローバル化」は「中華世界」のそれぞれのアイデンティティを抑制する働きがありますが、現在の「中華世界」では、「グローバル化」がそれほど進んでいないばかりか、「中華世界」の統合は依然として中途半端な状態が続いています。

「グローバル化」が与える「中華世界」のアイデンティティへの影響について、最近考えているもう一つのポイントは、「グローバル化」は、「中心」の「大陸」が「周辺」の「非大陸」の遠心力を牽制する新たなカードになるのではないかということです。「グローバル化」というのは、要するに現在の国民国家、主権国家を越える意味が強いです。国と国の壁が低くなると、国々のお互いの差異もだんだん消えていきます。お互いに区別しなくなるというような意味だと思います。そういう意味では、どうせこれから「グローバル化」が進むから、台湾のような独立したい「辺境」地域でも、わざわざ独立をする必要は無いという意見が、「中心」から出てくる可能性があるのではないかと思います。実際、私は1997年沖繩に滞在した時、独立したがっている人もいましたが、独立反対の意見の中には、「今はグローバル化の時代だから、そこまでやる必要はないですよ」というようなものがありました。そういうようなことがこれから中国ないし「中華世界」で起きる可能性が十分あると私は思います。

## V. 結 論

さて、最後に「北京五輪」で「中華世界」の求心力が高められるかどうかという問題について、結論を出してみたいと思います。

先ず大陸の方を見ますと、「北京五輪」で確実に中国の国家・民族のプライドが高められて、また本土域内の求心力の強化に一定の効果があると私は思います。そして、中国の対台湾・香港への姿勢はより強くなる可能性もあります。たとえば、最近、「香港人は植民地の民というか、本当の中国人ではない」というような差別発言も少しずつ聞こえるようになってきました。このようなことは、返還までは、あまり耳をしませんでした。

また、台湾の場合は、香港と同じかより厳しいでしょう。1995年の李登輝の訪米以来、中国の台湾に対する強硬姿勢は一層エスカレートしてきました。経済発展が順調で、中国の国力が増強していることが裏付けているわけです。「北京五輪」などで中国本土の人々の自信はさらに高められ、台湾や香港への憧れも減少していくでしょう。従って、台湾や香港などの遠心力に対して、柔軟な姿勢をとる必要性も低下していくのではないのでしょうか。

しかし、中国本土の求心力が今後も確実に高めていくには、二つの重要な条件が必要です。その一つは、これまで比較的順調だった中国の経済発展が今後2～30年の間にも持続できるかどうかということです。それから、中国政府が中央の統制力を、これまでと同じように維持できるかどうかということも、大きなポイントになります。

さて、本土以外はどうかという話ですが、まず「北京五輪」だけで「中華世界」の結束力が急速に強まるということは無いと思います。「北京五輪」で若干刺激されることはあるかもしれませんが、すぐに強まることは無いでしょう。しかし一方、中国の国力の増強を見ても、香港や台湾を含む周辺の「中華世界」に対して、北京を中心とする求心力が少しずつ強くなる方向に移って行くのではな

いかと私は思います。

しかし、それを牽制するものを簡単に取り除けると私は思いません。それは、台湾や香港ないし海外華僑・華人社会の大陸に対する政治的帰属意識の低さです。要するに、「中華世界」の全ての者は、現在存在している「中華人民共和国」という一つの国に対するアイデンティティを持てるかどうかは、決して楽観視すべきではないと思います。それが果たせるかどうかは、中国が民主化の方向に向かっていくかどうかという最後のキーポイントにかかっています。

以上、私の研究成果の発表というよりも一つの問題提起をしてみました。それを通して、皆さんと一緒に議論できたら良いと思っています。アイデンティティというのは自分の利益、自分の意識、自分の尊厳を強調することですが、もし本当に「グローバル化」の時代に入ったら、まさに一つの地球の中に区別が無くなります。この点について、私はギャルボ先生と同じようなことを考えています。ご清聴頂きましてありがとうございました。

# パネルディスカッション

(フロアーとの質疑応答)

## 【薬】

地球市民研究チームのチーフの薬会（やく・かい）と申します。今日の研究会は地球市民のテーマの研究会なので、パネルディスカッションの進行役を勤めさせていただきます。早速進めますが、パネルディスカッションといっても会場の皆さんの質問に対して、今日ご講演いただいた先生方に答えていただくという形をとりたいと思います。

## 【会場男性】

早稲田大学の李と申します。

ギャルポ先生のお話を聞いて、私、共感する部分はすごく感じています。地球市民というのは、一人一人ががんばっていかないといけないと思いますが、私自身、力の限界を感じる事がすごくあって、精神的な面が特にそうなんですけど、逆に視点を変えて考えてみると、物質的な面でもそういうところを越えられない部分もあるのではないかと思います。たとえば経済の格差とか、それによる文化・文明の衝突...。たとえば中国。49年から30年間くらい鎖国の時代で、外の世界をあまり知らなかった。それがオフになると、世界でそんなに格差があるのかなということになり、今は逆に人々は刺激を受けて、一生懸命、いわば極端な部分を走っているところがあると思います。そういう物質的な面に対してどのように対応すれば良いのか、良い方法があるのかということをお聞きしたいです。また、実際は国家間では政治的な面も生まれてくるので、そう考えると一人一人の力では、そこまで乗り越えることができるか、すごく迷っているところもありますので、その辺の先生のお考えを聞かせていただきたいと思えます。

## 【ギャルポ】

おっしゃるように、裕福であるものとそうでないものがあると、自分も裕福になりたいと競争心がわいてくることはあると思います。しかし、基本的に私が思うのは、徐々に、以前は国家が単位だったけれども国際機関の役割を果たすようになった。たとえば国連ができてから、特に社会制裁委員会とか、WHO とかが、たとえば伝染病がなくなったとか、あるいは地球全体の教育レベルを上げるとか、そういうことをするようになった。国際機関の活動によって、たとえば子供をたくさん作るよりも子供が少ないほうが生活が楽になるということを考えるようになった。今日では、国際関係の活動をする人たちは、必ずしも国家ではない。段々と、NGO から個人までが、国際関係において直接奉仕者として活動できるようになりました。私はやはりそういう意味で、一人よりは二人、二人よりは三人という形で協力してやっていくことが第一だと思うんです。

それから第二は、やはりシステムです。たとえば経済においても、あるいは政治においても、一人一人の人間のために法律を曲げたりするんじゃなくて、全体に通用するようなシステムを構築するべきだと思います。少なくとも私が日本に来たときは、今から35年前ですが、国家全体がひとつの目標として社会福祉ということを非常に重視していました。したがって、今日よりも日本の社会は貧富の差が無かったと思います。しかも、たとえば医療の面を見ても、あるいは教育現場を見ても、今日本が何故世界第一か第二の経済大国になったかということ、いろんな要因はあると思いますが、ひとつは当時のシステムが非常によかったと、私は思っています。日本に

においてそれが有効であれば、他の国においても多分、有効であるはずですが、あらゆるシステム、民主主義も含めてですね、あるいは宗教も含めて、それは人間を幸福にするためにあるのであって、そのシステムなりあるいは宗教なり、そのために人間がいるわけではない。だから絶えず私たちは新しいシステムを構築していかなければならない。あるいは現在存在する中で、良いものをどんどん、いろんな形で導入していかなければならない。そのために私はもっともっと、今後、国連というものを中心にさまざまな活動が行われていくのが一番理想的だと思っています。

それからもう一つは、林さんが一番最初に、私の考え方に対して一人一人の正義が大切だとおっしゃいました。その場合に、正義とは何かということそれぞれがきちんと納得できるような定義づけというものが必要だと思います。たとえば幸いにして、世界人権宣言というものができました。世界人権宣言ができたから、ある意味で私たちは、たとえ100%守れなくても、人間として守るべきものは何かという目標ができた。それと同じように、やはり私たちは、全体をよくするための目標というか、定義づけをきちっとして、できれば、それが今日のうちにできなくても明日、明日できなくても明後日というように進めていく。おそらくアメリカ合衆国が建国したときの精神というものは、そのとき全部実現できなかったと思う。奴隷解放も、そのときすぐにはできなかった。しかしそういうものがあつたから徐々に少しずつそういうことが実現していった。だから、これからも新しい定義づけ、新しいシステムを構築するのに知恵を絞っていくべきだと、私は思います。

#### 【会場男性】

奥村と申します。

今年の7月まで政府の役人をしておりまして、今はまったく自由人になりまして、自由人の立場から参加させていただきました。

私も今ご質問された方の意見に近いのですけれども、ギャルポさんにお伺いします。今国連とおっし

やいましたが、実は今、頭でそれを考えているんですが、ギャルポさんがおっしゃった問題は大部分がおそらく「心」の問題というか、宗教に根ざす、おそらく背景には仏教的な宗教観もありじゃないかと思って聞いていました。そういう「心」の問題を個人個人が持っていますね、それで人間のいいところをお互に見ていこうというのは、きわめて大事なことだと思います。ただ、それだけでは、人間というのはどうしても悪いこともするわけで、必ず悪いことも起こるわけで、これは歴史の示すところがあります。戦争もある意味では悪いことでもあります。これは国家間の悪いことです。個人から見ると、刑法に触れるようなことは必ず起きる。これを社会として抑える仕組みというのは、政治の世界で、ひとつの国家では一応「法」というルールを作って押さえてきた。悪いことをすれば捕まるという意味での抑止力があつた。国際的には国連というのが一応あつて、第二次大戦の反省で、そういうのを作った。私はむしろ国連の政治というか、戦争を含めた外交を含めた、法で抑える機能がむしろ低下していると思います。経済のほうはWHOとかIMFとかいろいろ制度があります。むしろそれを強化しようというのでみんな動いています。政治においても、今先生がおっしゃったシステムをきちっと作って、如何に安全保障を確保するかということが国際的に欠けているのではないかと感じております。むしろそういうことで、今後に備えていかなければならないですね、この研究会みたいに、という風な感想を持った次第でございます。感想めいて恐縮です。

#### 【ギャルポ】

他の動物と同じように、人間が人間を食べて生きている時代もあったと思います。しかしやがて人間はそういうところの分別というものが段々出てきました。それと同様に、たとえば国連憲章にしても、確かに国連憲章どおりに今いってないかもしれませんが、やはりそれを私たちのひとつの目標として、その顕揚を高めていくために努力することは必要だと思っています。それと同時に、たとえば国連がなぜ機能しないかということ考えた場合

に、私個人が思うのは、たとえば一つは国連の中に、常任理事国というものが、しかもその常任理事国の資格は何かということ、すべての国が核を持っているということとか、やはりそういうものから少しずつ変えていかなければならないと思います。さっき言ったようにシステムを、絶えず、少しずつ変えていくように努力しながらやっていくとすれば、私はうまくいくと思っている。しかしながら、たとえば国連の安全保障理事会にしても、ある意味では、お互いに対話する場を持っているだけでも、この50年の中で相当の役割を果たしてきた、と私は思っています。もちろん私たちの期待通りにはやってないけれども、進歩はしていると思います。ですから、その進歩に向けて努力すれば、今先生が仰ったようにいろいろ矛盾を抱えているが、少しずつ環境を良くしていくことが大事です。

人間一人の中にも、私の中にも、矛盾はあります。例えば人間は嘘をついてはならない、殺してはならないとか、いろいろと戒めがありますが、それを破らないためには、ある意味では環境がよくなければならない。私は泥棒をしたこともあるし、嘘をついたこともある。しかし、泥棒をしなかったり、嘘を言わなかったりするためには、そういう環境をなくすことが必要です。どうしても泥棒するしか生きていく方法がないときもあります。力があればかっぱらう、金があれば買う、あるいは相手の慈悲にすがって求める。それでもだめだったら、生きていくためには泥棒するしかないときもあると思います。ですから、そういう環境を私たちがなるべく整備して、そういうことをしなくても済むような環境を整備していくことがやっぱり必要だと思っています。それも、一人一人はできないわけですから、国連のようにひとつの機構に、私たちがもっと信頼を寄せて、もっと積極的にそこに参加していくことが大事だと私は思っています。

#### 【会場男性（徐向東）】

林さんに質問というか、感想です。よく日本で、「中華ナショナリズム」という言葉を聞きますね。最初、聞いた時に、あっそうだなと思いました。共

産中国を作り出した社会主義というイデオロギーが段々機能しなくなりまして、その代わりに、今の中国共産党が自ら、ナショナリズムとか愛国主義を以って、新たな求心力、新たな行動の道具としてそれを使っているという。最初はなんとなく聞いていたんですが、繰り返していつも同じことを言われると、ほんとにそうだと思ってくる。

たとえば最近のニューヨークの爆破事件を見てみると、爆破の後でアメリカ人はみんなアメリカの国旗を買い求めている。ものすごいアメリカの愛国主義です。あの国旗のほとんどは中国で作られているものですが、しかし、誰もアメリカ人のアメリカナショナリズムという言葉は言いません。ほとんど聞かないですね。実際にテレビを見てみると日本以上にナショナリズムなのに、誰もアメリカナショナリズムを言わずに、繰り返し繰り返し中国ナショナリズムという言葉を使います。それが今日の林さんの話を聞いてなんとなくわかったような気がしまして、要は、中国はまだ社会主義国家で所謂民主化が実現していないということなのです。

経済的にはものすごい。世界を見てみると台湾はだめだし、日本はだめだし、香港はだめだし、アジアでも世界でも中国だけがものすごいスピードで発展している。だから経済的にはスピード発展しながら、一方で、政治的な世界ではややまだ立ち遅れている。それに対する一種の心配みたいなところで、わけのわからない巨大な中華圏ということへの脅威が出来上がっているのではないかと思います。それに対する心配があるがゆえに、中華ナショナリズムという言葉もできてしまう。

しかし、今日のギャルボ先生のお話を伺いますと、まったくその通りで、僕は日本でチベットの人とも会うし、台湾の人とも会うし、香港の人とも会います。今回のアメリカの爆破事件後、インターネットで見ると、世界中の中国人はいろんな見方をしている。林さんが言うように、所謂中国国内では一部のヒステリックなナショナリズムみたいな感情で、アメリカもやっとな犠牲者になったのかと喜んで人もいますけれども、インターネットの上では、それに対するものすごい反発も中国人の中に出ている。

特に海外留学の中国人はほとんど誰も、アメリカがひどい目にあったから喜んでいるわけではありません。むしろものすごく反対しています。それはどうということかという、つまり WTO にしろ、オリンピックにしろ、こういうのが一つのきっかけになり、林さんが言ういわゆる求心力とかナショナリズムみたいなものがある。一方で、逆により中国を自由に、中国を開放する、より中国を民主的にする一つのきっかけでもあるのです。それが所謂台湾の独立とか、チベットの独立の問題も含めてですね、それがトータルで、所謂国家のあり方みたいなものに関わってくる。端的に言ってしまうと、例えば台湾が独立してしまえば、チベットが独立してしまえばそれで幸せなのかということです。今日のギャルポ先生のお話を伺って僕はすごく感銘を受けたんですけども、それは実際中華圏の中でのグローバル化みたいなもので、新しい国家のあり方とか、新しい共生のあり方というのは何なのかということが問題になる。むしろこのオリンピックであれ WHO であれ、経済の発展と同時に、むしろこれからの中国の新たな国家のあり方、新たな共生・共存のあり方に向かう大きなきっかけになるんじゃないかという、逆の捉え方もあるんじゃないかと思います。

#### 【林】

まったく仰るとおり、脅威があるんですね。脅威があるから中国のナショナリズムは注目されると思います。もう一つ注意してもらいたいのは、中国の愛国主義の教育がアメリカのそれと違うんじゃないかと思います。アメリカは確かに、学校でも国旗の掲揚や、国家の斉唱から、独立の歴史や国のしくみなど教育を行っています。しかし、一つの国策として、小学校から大学まで教育の現場で政府の決めた内容で強制的に一々やっているわけではありません。また、中国のほうは、要するに国策としてやっているということは非常に危惧されていると思います。やはり、脅威があるから注目されているんですね。

#### 【ギャルポ】

僕はですね、国家という概念は変わってきている

と思います。もはや、ある面では国家だけでは物事が成り立たない。昔は、多分、私のお祖母ちゃんぐらいのとき、日本人でも、外国人なんか一回も会ったことがなくても生活できたと思う。今はどうかという、一度どころじゃないと思う。それは何よりも、科学の進歩というやつで、時間と距離が短縮されてしまったことによって、今私たちは、お互いに依存度が極めて高い。ですから、基本的には生きていくために、国際化せざるを得なくなっているという状況で、これはひとつの人類の進化の過程だと僕は思っています。

現段階においては、私たちがまだ「国際」という言葉を使っている限りにおいては、一応国が単位になって物事は進んでいますけども、しかし、中身を見るとそれも崩れてきているような気がします。今のところ、ある意味では、私たちは国家によって保護されている。ある意味では国家によって私たちの自由を多少束縛されている。たとえば私たちが外国に行った場合には、この人は私の国の国民ですからというパスポートを与えられて、そのパスポートをまた別な国に認知してもらっている。しかしながら、国家の概念はいろいろ変わってきているし、実際、たとえば EU では、いくつかのすでに独立した国々が、その独立を放棄して一つにしよう、お金も一つにしようということをやっているわけです。だから私が思うには、人間にとって、そこに自分自身の幸せを求めることが自由にできれば、自然にそこに留まる。例えば中国政府がいい政策を採っているのに、チベット出ていけと言ったら、チベットはいやだと言うと思う。何とか仲間にしてください。台湾出ていけと言ったら、いやわれわれは中華人民共和国の一部ですとか言ってですね、一生懸命しがみつくとする。

ですから、問題は、それが自発的であるかどうかということ。たとえ話としては、あまりきれいではない、多分女性の前で大変失礼になるかもしれませんが、例えば、男女のかかわることで、お互いに愛し合っただけでかかわったらこれは素晴らしいこと、そして誰も認めている。しかし、どっちかがどっちかにそれを押し付けたら、これはレイプという

ことで、概念も違ってくるし、感じてくるものも違ってくる。ですから私たちが今、この地球全体の進行の過程の中において、民族とか、あるいは国家とかいうことを考えるときに、問題はお互いにどの程度お互いの意思を尊重して、そしてかかわりを持って、それに参加するかどうかということ、参加する資格が平等で自由であるかどうかということが、私は基本だと思います。

それと同時に、たとえば今日おっしゃった民族愛国教育にしてもですね、私は今までのようには成功しないと思います。なぜかと言うと、たとえば今から10年前、天安門事件が中国で起こっても、たくさんの中国の人はそれを知らない。知らなくても済むようなシステムになっている。そういう社会だった。しかし今は、一日大体50万通のEメールが海外から中国へ送られている。そして中国からも送られているわけです。ですから、もはや、文化大革命の時代が一番いいんだよといっても、それはもうできない。これは中国だけではなくて、世界全体が徐々にそうなっていると思います。

同じように、同時多発テロについて、やがてはみな、そもそもなぜそういう事件がおきたか考えるようになると思います。今、メディア文化の情報化社会において、私たちは何回も何回も同じ画像を見せられた。だけど、やがて、考えるようになります。今日、質問していただきましたように、この世の中の進歩の差というものを今後どうやって解消していくか。あるいは今進んでいるこのグローバルゼーションというものが、何を基準にしてどういう形で進んでいくかということについて、もっともっと深刻に考えなければいけない時代が来ると思います。その中で追求していくと、私たちが見ている現象だけじゃなくて、その普遍的な原因が何であるかということについて、突き詰めていくことになっていくと私は思っています。ですから、そうなってくれば国家とか、民族ということも変わってきます。例えば私が日本にいる時、あまり自分がチベット人であるということを意識しなくても済みます。何故かということ、少なくとも私に対してあまり差別がない。差別がないときには自分もあまり意識しない。差別

があったら意識すると思う。意識するし、そして憎むようになると思う。システムを憎むかもしれませんし、あるいは差別する日本人を憎むかもしれません。

今、中国にしる、アメリカにしる、両方が脅威を感じている。お互いにそういうことを感じなくても済むようになれば、新しい道が見つかると思います。今、部族とかを超えて、段々とナショナリズムにきました。やがてそれこそ宇宙人が来たら、地球人は一緒になると思う。そういうふうに、私はこれから信じていくと思います。それを信じたいんです。もちろんこれは、ある意味では私の夢であり理想ですけども、しかしそれに向かって私たちが希望を持っていくしかないと思います。幸いにして今私たちはお互いに通じ合えるだけの、言葉ができなくても、だれかに通訳してもらえ。「五体不満足」という本を見たら、人間必ずしも五体満足でなくても幸せになる方法があるということを知りました。それと同じようにですね、私たちが今まで障害だと思ってきたものが、やがてこれが利点になることがあると私は信じています。

#### 【会場男性】

早稲田大学のブレンサイと申します。モンゴルから来たのですが、ギャルボ先生にお会いできてすごくうれしいです。

お二方にひとつずつ質問があります。まずギャルボ先生から。アメリカの問題から考えますと、やはり強権政治が行われている限りでは、弱者の利益をどう訴えるかという問題が、ひとつの課題だと思います。それをいかに処理していくかの中で、それに代わることのできる候補が見つかるのではないか。中国はいち早くアメリカを支持した。新疆のイスラム原理主義者もその中にあるわけですから、中国が国内で行っている民族抑圧政策を、これに対しても、理解してくれという便乗があったわけです。そういうことを考えますと、強権政治というのはすべての根源だと思わざるを得ない。訴える手段にはいろいろと問題があるでしょう。ダライ・ラマは一番最初に、プッシュ大統領に報復攻撃をしないでくれとい

いう書簡を送ったらしいですが、僕が一番関心があるのは、強権政治に対する訴え方、何が一番有効であるか、これをギャルボ先生に伺いたいです。ドライ・ラマの平和主義がチベットの現状を変えるもっとも有効な手段であると考えておられるかどうか。中国がその中でそれに対してどう考えているかということ。

それから林さんに。「中華民族」という言葉が大陸で氾濫している。内モンゴルである学校の先生が「われわれはみんな中華民族の子孫である」と言ったら、あるモンゴル人の子供が手を上げて、「いや、俺はチンギスハンの子孫である」といったらしい。要するに中華民族というのはどうも新しく生まれた民族らしくて、それについてはどうお考えですか。

#### 【ギャルボ】

いかなる理由があっても私は、暴力ということは肯定できないと思います。ですから、今回のテロ事件の、原因はアメリカにあると言っていますけれども、彼らが使った手段はいいと思ってないし、それを私たちが否定し続けることが大事だと思っています。それで、今おっしゃった平和主義者として今後どうするかということですが、僕は3年前に中央アジアへ行きました。中央アジアへ行って聞きますとみんながジンギスカンを悪魔だと言う。しかし、私たちモンゴロイドの人たちにとっては英雄ですよ。同じ出来事に対して二つの見方があるわけです。今まで、私たちは過去のことにごだわりすぎている。過去のごだわりすぎると未来を失ってしまうと思います。過去は、そのときの時点においてひとつの社会であり、ひとつの世界であり、ひとつの正義が、ひとつのシステムがあった。それを私たちが、たとえば昔アメリカには奴隷があったからといって今から糾弾してもしょうがないと思います。大事なことは、今奴隷を使うことが正しいかどうかを考えるべきだと思います。

そんな風に考えて見ますと、たとえば現在、さっきおっしゃったように、なぜ今回ロシアも中国もインドも、大国が報復に賛成するかというと、それはやはりチェチェンの問題を抱えている、ウイグルの

問題を抱えている、カシミール問題を抱えている、この際チャンスだから一緒にやっちゃえということで、お互いに利害が一致した。だからあれだけしゃんしゃんと決まっていって、うまくいっている。ですから私は、むしろ今、そういうことは許すべきではないと思う。過去に起きたことで死んだ人は生き返ってこない。大事なことは今現在、世の中でそういう不平等があったり、強権政治というものがあつたりしたら、それに対して私たちは声を出すべきだ。

チベットについては、私は中国の方々の良識を信じています。それはどういうことかということですね、マハトマ・ガンジーがいくら偉い人であっても、英国の中でガンジーの考え方を理解し共鳴する人が出てこなかったら、多分インドの独立はなかったと思います。実際ガンジーを支援する白人もいました、ジャーナリストもいました。そういう人たちが徐々に徐々に変わってきました。そして英国人の中でも、自分たちのやってきたことは恥ずかしいことだったと思うようになってきました。

残念ながら、たとえば中国の場合に、中国の方々がチベットのことを知らない。政府が作った教科書、ひとつの種類の教科書でしか教育できない。その人たちがそれを一生懸命勉強してそれを真実だと思ったら、それはそれを真実だと思っている人の罪ではないのです。その人はそれが正しいと思っているわけです。しかし、幸いにして今世の中はだんだん変わってきて、自分自身は何が正しいかということ、たくさん眺める中で、自分自身で知るようになって来ました。日本では7割の人が大学へ行って、大体98%~99%の人が文字が読めるんです。中国ではたぶん大学にいける人は5%、7%ぐらい？

#### 【薬】

最近は大分増えてきて、多分10%ぐらい。

#### 【ギャルボ】

10%ぐらいですね。そうすると、たぶんまだ10%の人たちが外へ出ることによって、10%の人たちが見たこと感じたことによって、徐々に徐々に変わっていくと思います。そうすることによって、たとえ

ば中国の方が、自分たちの今のやり方、押してもだめだったら引いて見なければならぬということを考えるようになると私は思っているんです。時間はかかると思います。中国がチベット人を一人殺したからといって、チベット人が中国人を殺したら、これは人口の面からいってもチベット人がすぐ終わってしまう。だから私はやはり中国の方々の良識、そして自分自身がやがて考えてくださることを、それに絶えず訴え続けることが大事だと思っています。

ですから、私が外国の人たちに対してまず言うのは、世論がだんだんみんなに伝わって行って相手を変えていくということです。これが私は武器よりもっと強いと思います。ましてやこれからの世の中というのは、鄧小平さんは 1000 人出して 1 人帰ってくればいいと言ったけれども、たくさんの中国人が留学から帰っていますよね。そしてその人たちが外の世界を見ている。外の世界を見て、そして外から中国を見ている。彼らは今言ったほうがいいのかどうかはいろいろ自分で判断するでしょうけれども、しかし人間である以上は何かを感じているはずですよ。私はそれがやがて中国を変えていくと思います。

オリンピックも同じです。私は中国でオリンピックをやることをとても喜んでいますが、個人的には、それは何故かと言うと、たくさんの世界中の人たちが中国に行くことによって、中国の人々がたくさんのかことに接することができて、一つまた新しい空気が入る、私はそう思っています。

#### 【林】

「中華民族」という言葉の意味ですけれども、私の考えていることを結論から申し上げますと、一つはこれは新しい言葉です。もう一つは、これは政治的用語だと私は思います。

まず、なぜ新しい言葉かということ、私が調べたところですが、明治の末に、日本で生まれた多くの言葉には「民族」という言葉がありました。確かに、「民」とか「族」とかという字は、中国の文献には大昔からありましたが、現在の民族という意味での「民」プラス「族」という言葉は、日本で生まれたんです。ある意味では逆輸入ということで、「民族」という用語は

中国でもその後使われるようになったわけです。それが一つです。

もう一つは、これは政治的用語だと思います。なぜかと言うと、それは今の「中華民族」の定義に関連しています。中国の文献から考えると、現在中華人民共和国の国土内の人々は「中華民族」と定義しています。そうすると問題が出てきます。たとえば内モンゴルの方が「中華民族」の一員とすれば、モンゴル共和国の方は「中華民族」ではないというのは、おかしいんじゃないか。これはモンゴル族だけの話ではなくて、朝鮮族の問題も同じです。

中国では、実際に「中華民族」という言葉を使うようになったのは 20 世紀の初めぐらいですね。梁啓超という清末の思想家ですけれども、これを日本から持って帰って中国で使うようになったのです。しかしこの「中華民族」の意味は最初から、かなり転々と変わりました。

ご存知のように孫文の革命では、北の異民族を取り除いて自分の民族の国家、政治体制を完成させるということを考えていました。そのときの異民族というのはまず満州族です。つまり、満州族は「中華民族」ではないと考えていたのです。しかし、その後、それがまずいと気付きました、自分の国じゃないと。また、東北の三つの地域も中国の一部であると考えたのではないかと。そうすると別の言葉が生まれた。それは「五族協和」ですね。五族というのはチベット・モンゴルも含めています。しかし、もう少し経ってから、これはあくまでも一部の民族でこれだけじゃないと気付きました。それならということで、「中華民族」を一つの統一した民族として考え始めたのです。それ以来、基本的にずっとこの意味で使われてきました。

ですから、「中華民族」の用法は、実際に使っているのは政治的意味でしか成り立たないのではないかと私は思いますが、いかがでしょうか、この会場には、中国の方も大勢いらっしゃいますし、台湾の方もいらっしゃいますね。実はこの「中華民族」を考えると非常にややこしいですけれども、同じように「中華世界」という言葉を使うときも、少し不安感がありました。私が「中華世界」の指している地域

は中国本土・台湾・香港それから海外の中国人社会ですけれども、結局チベットが入っているかどうか、内モンゴルが入っているかどうかという論争があるでしょうね。それぞれの意見があるかと思いますがけれども、「中華民族」と同じように、「中華世界」もまた非常に複雑な概念ではないかと思えます。

【葉】

そろそろ時間になるかと思いますが、もう一人。短くお願いします。

【会場女性（高野）】

林さんに簡単にひとつ質問ですが、中国のナショナリズムというのはどのように、ご自身で定義付けられますか？

【林】

今日私が話している中国ナショナリズムは、基本的に中国を括弧で括弧しています。それはどちらかというと中国本土の人々の思っている、自分の民族・国家に対する一つのアイデンティティだと思います。簡単に言うとそうなりますが。

【会場女性】

内モンゴルとか新疆ウイグル自治区とか、そういった方々は含まれないような気がするのですが。

【林】

先ほど会場からも「中華ナショナリズム」という言葉を聞きました。ある意味では「中華ナショナリズム」というのはもっと広い範囲が入ってほしいという思いがあったのではないかと思います。私の使っているカッコつきの「中国ナショナリズム」は、どちらかというと、大陸の人々を中心に考えていました。ある意味ではそういう民族の意味だけではなくて、中華人民共和国に対する一つのナショナル・アイデンティティだと思います。そういう意味では、ほかの中華社会の、香港・台湾あるいは海外華僑の一部の方々にとっては、自分が中国人だと思っても、中華人民共和国に対するナショナル・アイデンティ

ティは持っていません。しかし大陸の方々は両方一緒になっている傾向があります。内モンゴルや新疆ウイグル自治区の住民の考えも複雑だと思いますが、それは正に「中国ナショナリズム」あるいは「中華ナショナリズム」の意味の難しいところを反映しているのではないかと思います。

【会場男性（李鋼哲）】

時間がないので簡単に質問します。

林さんの先コメントに対してですが、愛国主義教育に対して、林さんがいっているニュアンスは、中国では小さいときからそういう教育をやっているということですね。アメリカは別の形だと。これはある意味では、ギャルボ先生が仰ったように、先入観を持ってはいけません。愛国主義は悪くないと思えます。どの国も愛国主義教育をやるべきだし、ギャルボ先生の話聞いて思い出したのですが、愛国主義教育をやると同時に、ほかの民族、ほかの国に対して被害を与えない、あるいは傷つけない、こういう愛国主義をやるべきだと思います。そういう意味で、アメリカは民主主義だからそのナショナリズムは問題ないという先入観は間違っていると思います。これについて林さんの意見はどうですか。

もうひとつ、ギャルボ先生は、われわれは地球市民として共通の価値観を持つべきだと仰いました。そういうときに、あるひとつの価値観を別の民族に、あるいは別の国家に押し付けるべきではないと。悟らせるべきだと。これはある民族の価値観が、あるいはある国の価値観が正しいから、これをほかの正しくないところに悟らせるという意味なのでしょうか、それとも別の意味でなのでしょうか。私は、それぞれ違う価値観でも、お互いに尊重すべきだと思いますが、どうでしょうか。

【林】

簡単に申し上げますと、私は別に愛国主義教育がいいとか悪いとか言っていません。ただ、中国で高まっている人々のナショナリズムの一つ大きな要因だと考えているんです。アメリカのような所謂民主主義の国でも、愛国主義の教育はあると思えます。

まったくないとは言っていません。しかし私が考えているのは、今日言わなかったかもしれませんが、平和な時代に一生懸命ナショナリズムを深めようとしたり、あるいは愛国主義を一生懸命宣伝したりするのはやはりおかしいと思います。国が侵略されて民衆の命まで保障出来ないという民族の存亡にかかる弱い時には別な話ですけども。

もう一つ、民主主義の浸透がまだそれほど深くない地域での、国からの愛国主義ですが、政治のためのひとつのカードとして利用されやすいのではないのでしょうか。つまり、このような環境で行われる愛国主義教育はゆがみが生じやすいと私は思います。

【会場男性】

ひとつだけ聞きたいのですが、今のテロに対するアメリカの姿勢はちょっといい加減だと思いませんか？

【林】

私も同じように考えています。

【ギャルボ】

要するに、一方においては共通の価値観を持つべきだということ、一方においてはそれぞれの価値観を持つべきだということが矛盾しないかという意味の質問だと思います。今同じような背広を着て、世界中服装が変わってきました。いつの間にか、誰も押し付けなかったけれども、自然にそれが自分にとって便利であるということで、自然にそうなった。たとえばこのネクタイなんかでも、なぜ着けるか、しかもなぜお金をかけるか。僕のお母さんはグッチのネクタイで荷物を縛っていました。でも、僕のお母さんにとっては、そのときグッチは何の価値もなかった。紐なのです。だけど私たちは、それをグッチだと思うと、それには同じシルクよりももうちょっと値段を出す。私が言っているのは、それと同じように、それぞれの価値観に対して、私たちが押し付けるのではなくて、その共通の価値観が抱けるように啓蒙していく、そして徐々に、相手から、自分から進んで受け入れるような価値というのは、私は

持てると思います。

それはたとえば、私たちは、人間としてあらゆる生命の尊重をするでしょうし、あるいは国連憲章に基づく、あるいは世界人権宣言に基づくものを、徐々にみんなが共有していく。あるいは、民主主義というひとつの制度は、今のところ私たちが持っている制度のなかでは、ある意味で有効だと思います。少数の意見もそれなりの尊重する。そうするとそういうものを徐々に私たちが啓蒙して行って、相手に悟らせていく。これには時間がかかるけど、私はやるべきだと思います。ただし、アメリカの価値観が正しい、グローバリゼーションを押し付けていくと、今回のテロのようなことが結局起きざるを得ないと思います。だからそういう意味で、私たちが、やり方・手段を十分に選んでいかないと、いくら目的が正しくても、それが成功はできないと思います。手段も十分に選択していくべきだと、そういうことだけです。

【薬】

時間も本当にぎりぎりのところまで来ましたので、これで終わることにします。最後に、今日講演してくださったお二方の先生に大きな拍手をお願いします。



## 講師略歴

ペマ・ギャルポ（チベット文化研究所所長、岐阜女子大学教授）

1953年チベット、カム地方ニャロン生まれ。1965年来日。1976年亜細亜大学法学部卒業。1977年よりチベット文化研究所所長。1980年～1990年ダライ・ラマ法王アジア太平洋地区初代担当。現在は岐阜女子大学教授及び南アジアセンターセンター長。拓殖大学海外事情研究所客員教授。大阪読売テレビ「ウェイク・アップ」に出演する他、著書に「日本人へ最後の通告」（編著）小学館文庫。「立ち上がれ日本」雷韻出版。「おかげさまイズムの国際関係」万葉社など多数。全国的に精力的に講演活動を行う。

林 泉忠（SGRA 研究員、東京大学法学研究科博士課程）

国際政治専攻。中国で初等教育、香港で中等教育、そして日本で高等教育を受け、また、ハーバード大学フェアバンク・センターや琉球大学の客員研究員を歴任。論文に「台湾政治における蔣経国の『本土化』政策」試論（1972-1991）」（『アジア研究』第44巻3号）、「『香港人とは何か：戦後における『香港共同体』の成立から見た新生アイデンティティの性格』」（『現代中国』第74号）、「『台湾人』與『香港人』的塑造：回避『中國人』的雙胞胎？」『波士頓新聞』（「『台湾人』と『香港人』の創造：『中国人』から逃れようとする双子？」『ボストン・チャイニーズ・ニュース』）“Democracy in Taiwan: KMT Transforms Itself”, *Harvard China Review*, Vol. 2. など。



## 第 5 回研究会

### 「グローバル化と民族主義 - 対話と共生をキーワードに」に参加して

SGRA では、会員とともに創り上げていく研究会として、皆様のご意見をぜひお聞きしたいと思っております。ご協力をよろしくお願いいたします。

\* 各項目ごと選択は該当項目を で囲み、記述はアンダーラインにお願いします。

#### ・本日のプログラムについて

(1) プログラム全般                      よかった                      普通                      よくない

理由：  
\_\_\_\_\_

(2) どのテーマに興味をもちましたか。  
\_\_\_\_\_

(3) 開催曜日 時間について                      よかった                      特にこだわらない                      よくない

自由意見：  
\_\_\_\_\_

(4) 発表の平易さ                      もっと学際的に                      この程度でよい                      もっとやさしく

自由意見：  
\_\_\_\_\_

(5) 意見交換                      もっと多く                      この程度でよい                      もっと少なく

自由意見：  
\_\_\_\_\_

#### ・研究会の活動 運営に関することについて

SGRA は設立 2 年目を迎えました。SGRA は「多様性のなかの調和」を理念に、グローバル化社会への対応を考え、「よき地球市民の実現」に寄与することを基本的目的に活動しております。そして年 4 回の研究会を実施し、インターネットによる情報提供及び SGRA レポートの発行などを行っています。

については今後の参考にするため、下記についてお伺いします。

(1) SGRA の活動全般について                      現状で十分                      もっと活発に                      もっと異なる活動も加える

自由意見：  
\_\_\_\_\_

(2) 他団体との共同事業について                      もっと積極的に                      機会があればよい                      必要ない

自由意見：  
\_\_\_\_\_

(3) 研究会開催回数について                      もっと多く                      現状の年 4 回でよい                      もっと少なく

自由意見(希望の回数・日時)：  
\_\_\_\_\_

(4) 研究会の会場について                      東京国際フォーラムがよい                      どこでもよい                      他の場所がよい

自由意見(希望の場所)：  
\_\_\_\_\_

(5) 研究会への関心度                      関心大、今後も参加する                      テーマにより参加する                      時間があれば参加する

自由意見：  
\_\_\_\_\_

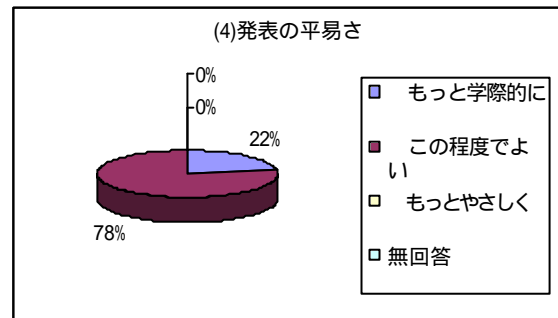
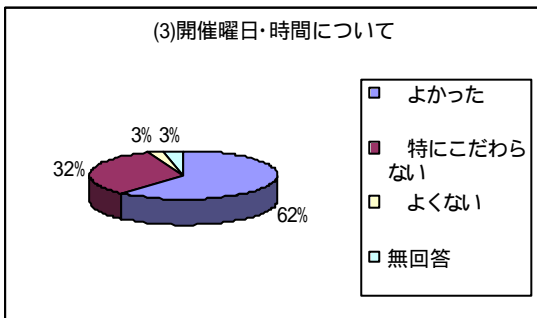
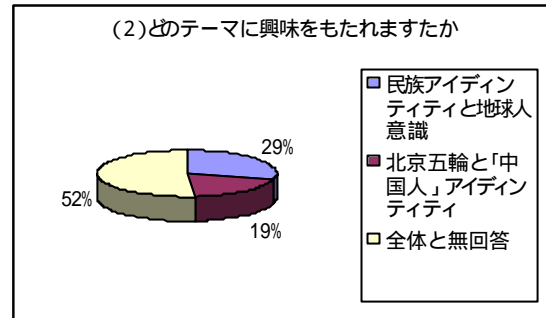
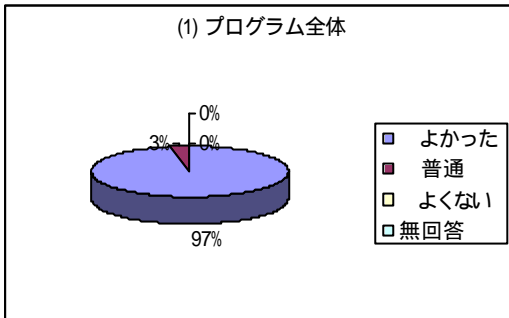
(6) 今後の研究会の案内について (非会員の方)

希望する (案内先 Mail か Fax 又は住所/氏名を下記に記入ください)                      希望しない  
\_\_\_\_\_

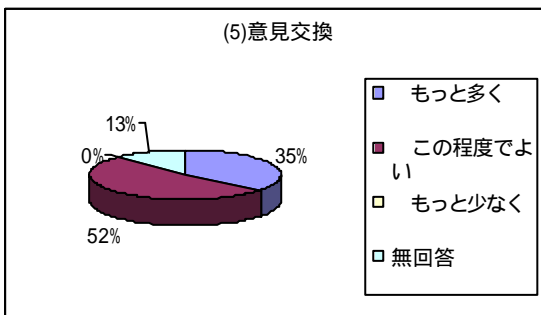
ありがとうございました

第5回研究会「グローバル化と民族主義 - 対話と共生をキーワードに - 」

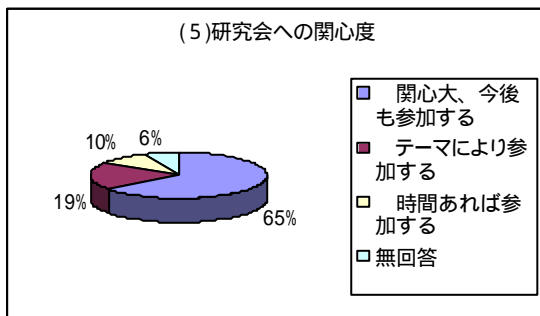
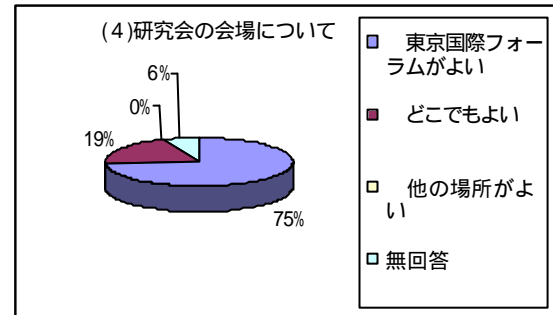
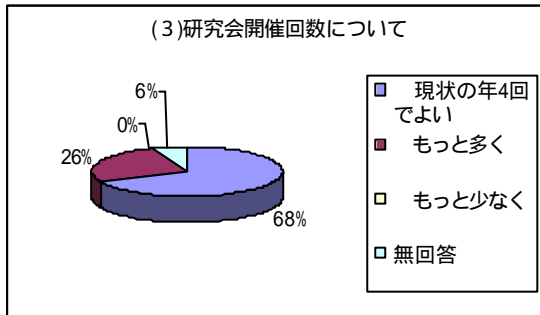
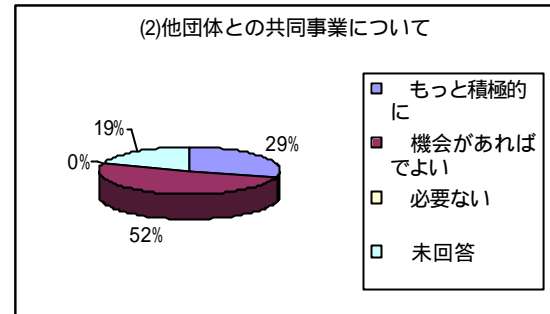
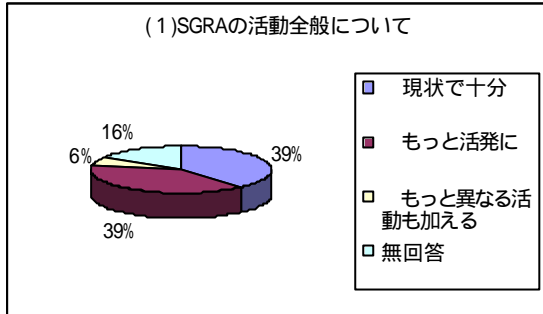
参加者フィードバックアンケート結果



.本日のプログラムについて



研究会の活動 運営に関することについて



SGRAレポート No .0009

---

投稿レポート

**「グローバル化と民族主義 - 対話と共生をキーワードに」**

---

編集 発行 関口グローバル研究会(SGRA)

〒112-0014 東京都文京区関口 3-5-8 (財)渥美国際交流奨学財団内

Tel 03-3943-7612 Fax 03-3943-1512

SGRA ホームページ : <http://www.aisf.or.jp/sgra/>

電子メール [office@aisf.or.jp](mailto:office@aisf.or.jp)

発行日 2002年2月28日

発行責任者 :今西淳子

印刷 藤印刷

---

? 関口グローバル研究会 禁無断転載 本誌記事のお尋ねならびに引用の場合はご連絡ください。